

## 『地獄の季節』 「悪い血」 考察

— 「異教徒の血」 をめぐって —

山 本 卓 ・ 藤 井 仁 奈

### An Essay about *Une saisons en enfer*

— Masks of Pagan Genealogy —

Takashi Yamamoto · Nina Fujii

In *Mauvais sang*, which is one of the chapters of *Une saisons en enfer*, the narrator gives some descriptions of his pagan genealogy. We are going to analyse the structure of the descriptions of 'ancestors', or 'an inferior race'. Then, we will be able to understand what the pagan genealogy means, and why the narrator wears the masks of 'a pagan'.

#### 1 「悪い血」について

「悪い血 (Mauvais sang)」は、ランボーによる『地獄の季節』の章のひとつで、8つの節から成り立っている。宇佐美齊は、この章題について、「異教徒や下層民といった劣等の血族への帰属をも意味する」<sup>(1)</sup>としている。また、小林秀雄はMauvais sangを「悪胤」と訳出している<sup>(2)</sup>。「胤」とは「血筋・血統」を意味する<sup>(3)</sup>。ルネヴィルは、「『賤しい血』 MAUVAIS SANGは、前世の生活を思い出すことから始まるのである。詩人は、この章の冒頭の部分を、現在の苦痛のいわば前提として書いた。」<sup>(4)</sup>と述べている。湯浅博雄はまた、次のように述べている。

「悪い血」において語り手は、祖先のガリア人、中世の農民、手におえない徒刑囚、野性的な黒人など、洗礼に値しない悪しき血筋、系譜をたどっている。そのモチーフの一つは、いったい私はなに者なのか、私とはだれなのか、ほんとうの私はなになのか、本来の私はどこにいるのか、真実の自分というものはいくつあるのか、といった問いを深め、突きつめることである。<sup>(5)</sup>

つまり、「悪い血」とは、語り手が自己のアイデンティティを認識する根幹である血筋のことである。ルネヴィルのことばに従えば、「現在の苦痛」の前提となるものこそ「悪い血」なのだ。

しかし、この章を「語り手のパフォーマンス」<sup>(6)</sup>と捉えた場合、別の側面が見えてくる。湯浅の挙げる「悪い血」の系譜について、宇佐美は「語り手は各々の節から節への移りゆきに従って、いや同じ節の内部においてすら、時空の制約をこえて自由に動き回って姿を変える」<sup>(7)</sup>と述べている。(この点については、図1を参照されたい。)語り手はいくつもの姿に身をやつし、いくつもの空間にその身を置こうとする。

	過去	現在	未来
此处	I II IV V	I II III IV V VI VII VIII	VI VIII
彼处	III	V VI	III V VI VII

図1

宇佐美育『フランス詩 道しるべ』臨川書店、1997年、131頁より引用。

宇佐美によるこの表に見られるように、「悪い血」の語り手は、過去・現在・未来の時空を自由自在に行き来しながら、その語りを紡ぎ出してゆく。

この小論では、語り手にとって「悪い血」とは何なのか、なぜ、また

どのように「悪い」のかを考察すると同時に、これが語り手の「パフォーマンス」であることをどのように示すのかを論じてみたい。

## 2 「劣等種族」のことば、「異教徒」のことば

「悪い血」の中で、語り手は「劣等種族 (race inférieure)」ということばを、2回が2節において、1回が3節において、合計3回使用している。2節では、3段落で「私がつねに劣等種族であったことは、疑いのないところだ」としたあと、7段落で「劣等種族が一切切を覆いつくした——世に言うところの民衆、理性、国民そして科学だ」と、劣等種族＝民衆の等式を成立させている。3節では、「飢えた私はがつがつと神を待ちうける。はるかな昔から劣等種族の出なのだ」と、キリスト教の神を待ち続けている、異教徒の血をひく劣等種族の出なのだと言う<sup>(8)</sup>。初めの「劣等種族」の使用では「常に劣等種族」と、現在も語り手の血筋が劣るという言い方だが、2つめの「劣等種族」は、「[劣等種族]であることから抜け出せると信じている」<sup>(9)</sup> 民衆に対して用いており、彼らに同調できない語り手が、己のことばを「異教徒のことば」(10段落)と表している。3つめの「劣等種族」は、「異教徒」の血をひく語り手(「異教徒の血が舞い戻って来る！ (Le sang païen revient !)」)が、キリスト教の神を待ち続けている「劣等種族」という用い方であり、「劣等種族」＝「異教徒」＝語り手という等式が成り立つ。

このように、「劣等種族」ということばの用い方は変化している。この変化について、劣等の段階が、1段下落していることが指摘できる。つまり最下層の「劣等種族」なのだ。語り手のアイデンティティの根源である古代の「劣等種族」、時代をくだり、「良い血」である「領主貴族」、聖職者、富裕な階級、教養人たちの血統<sup>(10)</sup> に対して農民・庶民を意味する劣等種族が、時代を下って近代では主流派の民衆となったこと

を示す「劣等種族」、その「劣等種族」に同調できずに「異教徒」となり、劣等種族にも劣る「劣等種族」という2段階だ。篠沢秀夫は「悪い血」について、語り手は「自分が一族の中で悪い分子だとしている」<sup>[11]</sup>と述べている。つまり、劣等の中の劣等を、「劣等種族」ということばのみで表現したことになる。

それでは次に、「劣等種族」に象徴される「悪い血」の系譜を見てみよう。

ガリア人の祖先から私は、白と見まがうほどに青く澄みきった眼と狭隘な脳漿、そして戦いの拙劣さを受け継いだ。身なりも彼らのそれと同じように野蛮だと思う。[…]

ガリア人というのは、獣の皮を剥いだり、草を焼いたりすることで暮らしを立てていたが、その方面では当時、一番無能な連中だった。

彼らから私が貰い受けたものは、偶像崇拜と瀆聖の好み。[…]

J'ai de mes ancêtres gaulois l'œil bleu blanc, la cervelle étroite, et la maladresse dans la lutte. Je trouve mon habillement aussi barbare que le leur. [...]

Les Gaulois étaient les écorcheurs de bêtes, les brûleurs d'herbes les plus ineptes de leur temps.

D'eux, j'ai : l'idolâtrie et l'amour du sacrilège ; [...]

「ガリア人」あるいは「祖先」については、1節から3節にかけて記述が集中している。1節1段落の冒頭、「ガリア人の祖先から私は (J'ai de mes ancêtres gaulois)」と、語り手が語りを切り出すにあたって、読み手の視線は過去へと投げられる。ここで、語り手が過去によって自

分を規定している意識が明示されている。1段落の「de mes ancêtres gaulois」の「de」と3段落「D'eux」の「D'」は、起源・出所を示す「de」<sup>(12)</sup>であり、この前置詞によって、語り手は現在の自分と過去の自分との関連を明示する。また、ガリア人たち祖先の描写には、七つの大罪や、「ありとあらゆる悪徳 (tous les vices)」が反復され、「異教徒」としての側面が強調される。

さて、この冒頭における「ガリア人の祖先」たちの描写は、3節における未来の自分に対する描写に二重のイメージを与える。それはあたかも透明なセロファンに印刷された、似たような構図の写真を透かし合わせて光りを当てるような、過去と未来の二重のイメージである。語り手はその二重のイメージの同じような場所にわが身を投影する。

異教徒の血が舞い戻って来る！ […]

今や私はアルモリックの浜辺にいる。[…] 私はヨーロッパを去る。海の風が私の肺を焼き焦がすだろう。きびしい僻地の気候が、私の肌をなめし革のように鍛えるだろう。泳ぎ、雑草を噛みしだき、狩りをし、とりわけ煙草をふかすのだ。沸騰する金属のような強烈なアルコールを飲むのだ、——あたかもわが祖先らが焚き火を囲んでしたように。<sup>(13)</sup>

Le sang païen revient ! […]

Me voici sur la plage armoricaine. […] je quitte l'Europe. L'air marin brûlera mes poumons ; les climats perdus me tanneront. Nager, broyer l'herbe, chasser, fumer surtout ; boire des liqueurs fortes comme du métal bouillant, — comme faisaient ces chers ancêtres autour des feux.

3節冒頭で、「異教徒の血が舞い戻って来る！ (Le sang païen revient !)」と述べた後の、この二重のイメージは、祖先が異教徒であること、その「異教徒」の血を語り手が受け継いでいることを明示している。「アルモリック (armoricaine)」について、宇佐美は「アルモリックはブルターニュのケルト名。このイメージは原始の素朴への回帰を強調する」<sup>(11)</sup>と述べている。また、「泳ぎ、雑草を噛みしだき、狩りをし、とりわけ煙草をふかすのだ。[...] 飲むのだ (Nager, broyer l'herbe, chasser, fumer surtout ; boire)」では、動詞が不定法のまま列挙されており、祖先の「野蛮」を意識した、語り口の簡素さが伺える。

「ガリア人の祖先」について、湯浅は「カエサルに征服されてローマ文明を受け入れる以前、キリスト教化される以前の」人々としている<sup>(15)</sup>。ローマ文明やキリスト教にとって、キリスト教化される以前の、土着の宗教を信仰する人々は、周縁的存在であり、異教徒であった。「キリスト教がアルプスを越えて、ケルト・チュートン文化に接触するようになると、ケルト・ゲルマンの神々は新しい宗教体系のなかで悪魔に変えられていった」<sup>(16)</sup>。異教徒たちが炎の周りで集い、宴を開いている様子は、2節5段落にも見られる。

[...] 赤々と照らし出された林間の空地で、私は、老婆や子供たちと一緒に魔女の夜宴を踊っている。

[...] je danse le sabbat dans une rouge clairière, avec des vieilles et des enfants.

魔女の夜宴 (le sabbat) について、湯浅はミシュレの『魔女』(1862)

を大略して引用している。それによれば、「夜宴（サバト）は、いわば […] カトリック体制・秩序に対してなされた挑戦のシンボルだった」<sup>(17)</sup>。確かに、サバトは、「魔女伝説を支えていた女性の集まり（集会）」を基盤として派生しており、「ヨーロッパ各地に拡がりを見せ」るさい、「サバトは各地域のフォークロアと習合しながら変種を生んだ」<sup>(18)</sup>。従って、ここでの「魔女の夜宴」とは、古代の異教がキリスト教の秩序のなかで脈々と受け継がれていたことの象徴として用いられていることばであるといえよう。湯浅はまた、「ランボーも熟読した『魔女』」のなかでミシュレは、カトリック中世の支配体制と秩序から排除され、弾圧された「犠牲者」であり、「反抗者」である「魔女」が、中世的世界観から抜け出し、科学的精神の第一歩を標した先駆者であると書いている<sup>(19)</sup>と述べ、キリスト教と科学の関連について言及している。

ブリュネルは、このテキストには2つの連続性があると指摘している。

このテキストには2つの連続性がある。まず、地理的な連続性だ。なぜなら、ドイツは特に魔女やサバトのあった土地だからだ。もうひとつは、歴史的な連続性だ。今日の地獄堕ちに通ずる血統の連続性である、 […] <sup>(20)</sup>

以上のことから、「悪い血」1－3節において、焚き火を囲んでいる「ガリア人の祖先」の構図は、語り手の「劣等種族」の血統を明確にしている。焚き火を囲む古代の「祖先」と、中世の「魔女の夜宴」を踊る語り手の姿は、未来の語り手の描写に、異教徒であった「祖先」の構図をあてはめさせ、語り手が「異教徒」であるという認識を揺るぎないものにしていく。

そして、4節では、「異教徒」であるがゆえに、地獄堕ちである語り

手の現状が切々と語られる（「わが身の悪徳 […]」を、背負ったままで (chargé de mon vice)）。しかし、「悪徳 (le vice)」の前では、語り手は主体となれず、「引きずりまわされ」ている<sup>(21)</sup>。ここに、語る行為において主体となれない受動性、そして語り手の現在に対する無力感が窺い知れるだろう。

次に、語り手の過去を回想する語りに現れるのが、5節の「徒刑囚」（1-2段落）だ。「いつも鎖につながれながらけっして妥協しない徒刑囚の姿に、まさに洗礼に値しない「悪い血」を見ている」<sup>(22)</sup>と湯浅は指摘する。語り手は想像裡にこの「徒刑囚」の声を聴き、震撼され、都会では「炎と煙とが海となって拡が」り、あらゆる「財宝が、無数の雷のように燃え上がる」のを見る（3段落）。炎に取り巻かれた語り手は、次に「銃殺執行の部隊と対峙」（4段落）、「処刑される「罪人」と自分とを同一視している」<sup>(23)</sup>。

これら「政治犯」<sup>(24)</sup>の系譜、カトリック体制・秩序における罪人となっている自分の姿を借りて、語り手は裁きを与えようとしている「司祭や教授、お偉い先生がた」が「間違っている」と主張する（4段落）。

おれはいまだかつてこの国民の一員であったことなどはないのだ。キリスト教徒だったことも絶えてない。刑罰を受けながらも歌をうたっていた種族の出なのだ。[…] 凶暴な人間なのだ。きみたちは間違っている……

Je n'ai jamais été de ce peuple-ci ; je n'ai jamais été chrétien ; je suis de la race qui chantait dans le supplice ; […] je suis une brute : vous vous trompez...



ここで、「種族の出 (de la race)」ということばに着目したい。『地獄の季節』のなかで、「種族 (race)」は合計9回用いられているが、そのうち6回が「悪い血」に集中している。さらに、9回のうち8回が、「錯乱I」の地獄の夫の台詞を含め、語り手の出自を表す古代の「種族」を示している。この引用部分でも同様に1-3節で言及された「ガリア人の祖先」の「種族」を暗示している。しかし、同時に「刑罰を受けながらも歌をうたっていた」種族、そして「凶暴な人間」がほぼ同格で用いられている。

続く5節5段落で、語り手は「そうだ、私の眼は諸君の光明には閉ざされているのだ。私は畜生だ、黒人だ。にもかかわらず救済されることは可能だ。[...] 私はハムの子孫らの真の王国に入る (Oui, j'ai les yeux fermés à votre lumière. Je suis une bête, un nègre. Mais je puis être sauvé. [...] J'entre au vrai royaume des enfants de Cham.)」と述べる<sup>(25)</sup>。語り手は「畜生 (une bête)」と同格の「黒人 (un nègre)」という「種族」になりすまそうとする。語り手は、「畜生」とか「黒人」という言い方で、「失われているなにものかを取り戻そうとする人間」を表そうとする<sup>(26)</sup>。つまり、「異教徒」である「黒人」は、「原初的な純粋さ」を保有している人々なのだ<sup>(27)</sup>。ブリュネルは、「彼が救済されることが可能なのは、あるいはむしろ地獄墮ちにはならないはずであることは、キリスト教の光明に彼の眼が閉ざされているからだ」と述べている<sup>(28)</sup>。

「刑罰を受けながらも歌をうたっていた種族」、「凶暴な人間」、「畜生」、「黒人」と、連続して語り手の立場が語られる。この間、語り手は「お偉い先生がた」によって裁きを受けている状態が続いている。つまり、「お偉い先生がた」との対峙によって、語り手が「異教徒」であることがことばを変えながら繰り返される。

ところで、語り手は2節では次のように語っている。

[...] 異教徒のことはを使わないでは、自分の言いたいことが言えないのだから、もう黙っていることにしよう。

[...] ne sachant m'expliquer sans paroles païennes, je voudrais me taire.

「悪い血」において、「異教徒 (païen/païennes)」ということばは2度しか用いられていない。それが、2節「異教徒のことはを使わないでは (sans paroles païennes)」と続く3節冒頭「異教徒の血が舞い戻って来る! (Le sang païen revient !)」である。2節終結部では、語り手を取り巻いているカトリック体制・秩序に対して、自分が「異教徒」であることを認識し、ことばを詰まらせて「異教徒のことはを使わないでは、自分の言いたいことが言えない」と述べる。さて、話を5節に戻せば、果たして5節終結部(5-6段落)は、2節終結部と同じ構造なのではないだろうか。つまり、5節4-5段落において、語り手は「原初的な純粋さ」を持つ「罪人」となり、「お偉い先生がた」である体制側の人々との対峙によって、自分が「異教徒」である「黒人」だと主張する。そして語り手は次のように述べる。

—いや、ことばはもういい。腹のなかに死人(ことば)を喰らい込むのだ。叫び、太鼓、踊り、踊り、踊り、踊りだ! [...]/ 飢えだ、渇きだ、叫びだ、踊り、踊り、踊り、踊りだ!

—*Plus de mots. J'ensevelis les morts dans mon ventre. Cris, tambour, danse, danse, danse, danse, danse!* [...]/ *Faim, soif, cris, danse, danse, danse, danse!*

湯浅は、この部分について、次のように述べている。

[…]「自分」が本来的には「獣」であり、「黒人」であることを「知る」ためには、理性的-知的-言葉的（すなわちロゴスの）なものから抜け出すほかはないということ、[…]未知なるもの——へと入り込んでいく以外に道はない、と直感したのでろう。[…] 場合によっては呪術的な思考のほうを信頼し、死者の威力を自らの体内に取り込むために「死者を腹のなかへ埋葬する」食人種のような人間、叫び声をあげ、太鼓を打ち、ダンスをする人間に同一化する。<sup>(29)</sup>

ここで述べられている「踊り」ないし「ダンス」は、『イリュミナシオン』における（たとえば「岬」や「子供のころ」第1節におけるような）優雅な「踊り」とは対極にある、荒々しく、野卑で激烈な「踊り」である。この「飢え」と「渇き」と「叫び」を伴った「踊り」の場面を境に、語り手は白人によってキリスト教化された黒人となり、いつしか現実のキリスト教白人社会に埋没する（6-7節）。

「飢え」、「渇き」、「叫び」は「地獄の夜」の章において重要なキーワードであり<sup>(30)</sup>、語り手の描出する「地獄」には欠かせない。これらの身体感覚は、「炎」や「砂漠」などととも、乾燥を示す「地獄」のエレメントだ<sup>(31)</sup>。また、語り手が「異教徒」となって「踊り」を踊るのは、2節の炎の周りでの「魔女の夜宴」と同様だ。「炎」と「踊り」の構図をここで用いることにより、語り手は「異教徒」であることを強調している。語り手はここにきて、何も語れずに苦しんでいる。そして、それこそが「悪い血」を受け継いでいるがゆえの「地獄」の苦しみのものでは

ないか。

### 3 「この世」の模倣としての「笑劇」

以上のことから、「悪い血」における語り手は、あらゆる時代背景に自己を投影しようとも、語られるそれらの社会体制においてはつねに「異教徒」であり、「劣等種族」であったと語る。「異教徒」であるがゆえに「地獄」にいることを感じ、「飢え」、「渇き」を感じ、「叫」ばなくてはならない。こうした語り手の〈ことばを失う苦しみ〉は、8節にも断片化した叫びのことばとなって表現されている。

ブリュネルは、「悪い血」4節（「前進だ、重荷、砂漠、倦怠、そして怒り。(La marche, le fardeau, le désert, l'ennui et la colère.)」)に着目し、「地獄＝砂漠＝フランス的な生活 (Enfer = Désert = Vie Française)」という等式を提示している<sup>(32)</sup>。つまり、「地獄」とは「フランス的な生活」、いわば詩人の生きた「近代フランス」という現実世界こそが語り手の「地獄」ということになる。8節では「工具 (Les outils)」、「武器 (les armes)」、「時間 (le temps)」といった、「近代」を構成することばが登場する。

語り手は、7節末尾で次のように語る。

際限のない笑劇だ！ 私の無邪気さには涙が出るほどだ。人生はみんなて演じる笑劇なのだ。

Farce continuelle ! Mon innocence me ferait pleurer. La vie est la farce à mener par tous.

ここで、語り手はそれまで語ってきたものを「笑劇 (farce)」という

ことばに収斂させる。つまり、「悪い血」における語りは、日常の滑稽劇であり、語り手の「パフォーマンス」なのだ。それまで語られる過去・現在・未来のあらゆる時代のあらゆる空間は、いわば「舞台装置」（「錯乱Ⅰ」）や「書き割り」（『イリュミナシオン』『眠らない夜』第2節、あるいは「卑俗な夜想曲」における「仕切り壁」）の類であり、語り手は役者だったということになる。

語り手は3節4段落で次のように語る。

私は戻ってくるだろう、鉄の四肢、褐色の肌、猛々しい眼つきをして。その面魂を見て、ひとびとは私を屈強な種族の一人とみなすだろう。

Je reviendrai, avec des membres de fer, la peau sombre,  
l'œil furieux : sur mon masque, on me jugera d'une race forte.

「面魂 (masque)」には、「仮面」という意味も、もちろん含まれる<sup>(33)</sup>。これは語り手が自己を客観化していることを示している。しかも、これが「仮面」だと知っているのは話者だけだ。未来形で大胆な計画を立てながらも、それを冷静に客観視するもう一人の語り手がいる。この自己客観化の意識には、内省、つまり自己への眼差しが含まれている。

「仮面」をつけることで、「屈強な種族」の一人とみなされようとする語り手は、「ガリア人」や「黒人」に対して自己同一化を行うが、これらの「悪い血」の系譜を、結局演じているに過ぎない。演じながらもキリスト教的思考システムあるいは社会体制と対峙し、戦っている。語り手は、「黒人」的な異質性を内包する〈自我〉、そのせいで統一性を失い、内的に力と力の競い合いに揺れ動き、〈もともとの自分がなになのか決

められない自我)を浄化して「本来の白人」的な同一性としての自我へと回帰させようとする心的な仕掛けと絶えず戦う」<sup>(34)</sup>ことを決してやめない。

7節4段落で、それまで現実のカトリック体制・秩序に埋没している語り手が、ふとわれにかえったかのように、自分のことばを否定する(「駄目だ、そんなものはいやだ (non, je ne peux pas)」。2節で「ただ、いつもひとりぼっち (Mais toujours seul)」だったと語る語り手は、現代を背景にしても「私の生活は、十分な重みがなく、舞い上がって、漂っている (moi, ma vie n'est pas assez pesante, elle s'envole et flotte)」と、浮薄な生を露呈させる。

ブリュネルは次のように述べている。

「悪い血」は、それゆえ、たとえその構成やイメージによって、この部分が多少異種混交のように思え、『異教徒の書』あるいは『黒人の書』という最初の構想により近いものに思えるとしても、『地獄の季節』のほかの章としっかりと結びついている。このわが身に関する、過去と種族と血統についての決定論に関する大いなる瞑想は、つねに断片化された状態だ。というのも、劇的な形態で示されるため、ぎくしゃくと語られるからだ。この瞑想は、悲愴な叫びによって呼び覚まされる感情と狂人の大げさな身振りを前にしての驚嘆との間で、読者を躊躇わせるような誇張表現によって、記されさえするのだ。しかし、その滑稽は決して休息ではない。この滑稽は、『リア王』における道化の滑稽のように、人がいつも何かの、誰かの、神の、あるいはその人自身の犠牲となっている、世知辛いこの世という喜劇の、誇張され、辛辣に皮肉られた模倣なのである。<sup>(35)</sup>

「悪い血」の語り手は、あらゆる時代・空間から構成される「舞台装置」に自らの姿を求め、語り続ける。しかし、そのいかなる「舞台装置」にも、相容れることのない「ひとりぼっち」の「異教徒」としてのみしか、自己の姿を見出すことはない。それはカトリック体制・秩序に組み込まれている語り手の「現在の苦痛」の根本的な異質性が「異教徒の血」、つまり「悪い血」に由来するからなのだ。それゆえに「洗礼の奴隷」（『地獄の夜』）である語り手はことばを失い、苦悶し、内省し、己の内面に抱え込んでいる「地獄」という書き割りから逃れられないまま、次の「地獄の夜」の章を語り始めるのだ。

#### 注

テキストは、Arthur Rimbaud, *Œuvres Complètes*, édition établie par Pierre Brunel, La Pochothèque, «Classique Modernes», 1999. [以下、*OC*と略記する。]を使用した。また、精読に当たっては常にArthur Rimbaud, *Une Saison en Enfer*, édition critique par Pierre Brunel, Librairie José Corti, 1987. [以下、*USE*と略記する。]を参照した。本論の引用箇所における日本語訳については、宇佐美齊訳『ランボー全詩集』（筑摩書房、1996年）[以下、『宇佐美訳全詩集』と略記する。]を使用した。

本稿の中には、今日の人権意識に照らせば不当・不適切と思われる表現を含む引用もあるが、しかし、原文テキストの時代背景および翻訳者による原著者の雰囲気や精確に伝えようという言葉の選択を尊重し、敢えてそのまま引用した。

- (1) 『宇佐美訳全詩集』256-257頁。
- (2) 小林秀雄訳「ランボオ詩集」東京創元社、1998年、18頁。

- (3) 鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』大修館書店、1992（平成4）年、683頁。
- (4) ロラン・ド・ルネヴィル『見者ランボー』有田忠郎訳、国文社、1971年、191頁。
- (5) 湯浅博雄『ランボー論 〈新しい韻文詩〉から〈地獄の一季節〉へ』思潮社、1999年〔以下『ランボー論』と略記する。〕、250頁。
- (6) 『宇佐美訳全詩集』256頁。
- (7) 宇佐美斉『フランス詩 道しるべ』臨川書店、1997年、130頁。
- (8) ブリュネルは、この部分について、「異教徒」ゆえにここそこに無駄に福音が過ぎ去って行くのだと指摘している。OC、p415.
- (9) 平井啓之、湯浅博雄、中地義和、川那部保明訳『ランボー全集』青土社、2006年〔以下『青土社版全集』と略記する。〕、992頁。
- (10) 『青土社版全集』992頁参照。
- (11) 篠沢秀夫訳注『地獄での一季節』大修館書店、1989年、82頁。
- (12) 田村毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社、1985年、485頁。
- (13) 「この想像、これが地獄からの脱出口である。詩人の眼の前にこの想像が浮ぶ、まるで詩人の魂の求める非情の空気をその周りに拵え上げ、それでもって詩人の魂を和めるという一つの方法でもあるかのようにして。」ジャック・リヴィエール『ランボオ』山本功・橋本一明訳、人文書院、1954・1975年、82頁。
- (14) 『宇佐美訳全詩集』259頁。
- (15) 『青土社版全集』993頁。
- (16) 上山安敏『魔女とキリスト教』講談社、1998・2008年、60頁。
- (17) 『青土社版全集』994頁。
- (18) 上山安敏『魔女とキリスト教』講談社、1998・2008年、93-94頁・98-99頁。



- (19) 『ランボー論』 125頁。
- (20) *USE*, p.207.
- (21) ブリュネルは、「劣等種族」だと指摘している。*OC*, p. 415.
- (22) 『青土社版全集』 996頁。
- (23) *Ibid.*, pp.996-997.
- (24) *Ibid.*, p.992.
- (25) 「まるで天——もっとも暗い天ですが、——にも登る心地でした。そこへ行くと、貧者、聾啞者、盲人となって、その場に取り残されたい、とまで思ってしまうのでした。」(『錯乱 I』)と共通する「救済」のありかたではないだろうか。
- (26) 『青土社版全集』 997頁。
- (27) *USE*, p.224.
- (28) *Ibid.*, p.224.
- (29) 『青土社版全集』 997-998頁。
- (30) 「地獄の夜」における身体感覚については、拙論、山本卓・藤井仁奈「『地獄の季節』の一考察——「地獄の夜」における語り手の身体感覚と空間把握について——」文教大学「言語と文化」第20号(2007) 70-97頁参照。
- (31) 「ランボーの地獄とは、おそらく感覚の空洞、焼け焦げた大地にはかならない。」ジャン=ピエール・リシャール『詩と深さ』有田忠郎訳、思潮社、1995年、237頁。
- (32) *USE*, p.217.
- (33) 田村毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社、1985年、1161頁。
- (34) 湯浅博雄『バタイユ 消尽』講談社、2006年、47頁。
- (35) *USE*, p.227.